

## 幼稚園・保育園

## 続 保育のこころもち



秋田 喜代美

学習院大学教授

秋空の下で、数年ぶりに対面での公開保育や公開研究会が行われている。オンラインでも研究発表や講演はできるが、リアルな子どもの姿や保育の環境は、その場にいないと感じ取れない。

ある園では、3歳児がバッタのお面バンドを着けてバッ

タを探している。園庭の片隅の落ち葉が盛られている所で「ふわふわだ！」と足裏からの感触を味わい、シャベルで軟らかな土を掘っている子もいる。バッタを探しつつも土に触れて掘るなどし、場の探索を楽しんでいる。

その場所は「土工場」と名付けられ、看板が付けられて

▶221

## 秋の恵みが与えるもの

いる。落ち葉などを堆肥化し、フワフワな土を保育者と子どもたちが共に作っている。

また園庭の片隅の築山に行くと、5歳児が何かの種を見つけて「何の種か分からぬけど埋めよう」と、その種を大事に地面に埋めている。「そうだ、水をあげなきゃ」

大事に育てる関わりの素地を育んできたことが分かる。

種や果物が実り、さまざまな樹木の落ち葉や虫と出会うなど、秋の恵みは子どもたちに新たな出会いや遊びの機会を与えてくれる。それは、保育中には見えにくい、日々の保育者の園庭保全や土づくり

## 新たな出会いや遊びの機会に

と周りの子に「踏まれないよう見えててね」と言い、じょうろに水を入れてくると、そこに適量をまいている。

さらに、その場所を丸く石などで囲い、「?なぞのしょくぶつ」と書いた紙を2本の棒に付けた看板を立てていた。これまでの園生活での経験が「謎の種」に愛着を持ち、

などが長年行われたことが生み出す園庭の豊かさである。大地の恵みを意識する園文化は一日にして成らず。子どもも園庭の中でゆっくり時間をかけ、その子らしい足取りと歩みで育つ。それを共に喜び味わう保育者でありたい。

次回は28日付掲載